

博物館がつなぐ人、文化、社会 ——異なるものへのまなざし

40以上にわたり文化人類学研究を牽引してきた大阪・千里の国立民族学博物館（民博）。急速なグローバル化による社会の変化のなかで、「これからの博物館はどうあるべきか」を常に問いかけながら、さまざまな取り組みを進めてきた。

「取り組みを通じて、これまでの『自文化』と『異文化』という区別をはじめ、日本に住む我々のものの考え方のなかにも偏りがあることを発見した」と話すのは、同館の吉田憲司館長だ。

そのプロセスは今号のテーマ「異なるものをつなぐ」ための重要な視点となろう。吉田館長に民博のこれまでの取り組みや、博物館がつなぐものとその可能性についてお聞きした。

加藤しのぶ=取材・執筆 宮村政徳=撮影

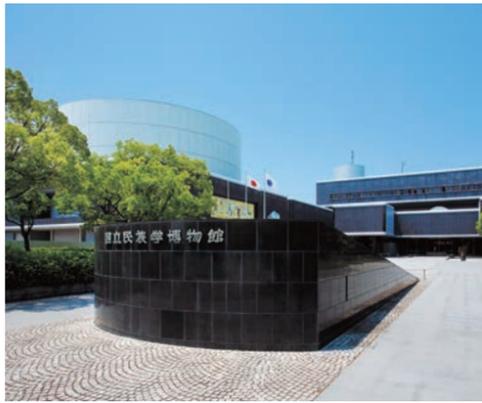


インタビュー

【国立民族学博物館館長】

吉田憲司 Yoshida Kenji

国立民族学博物館は、梅棹忠夫初代館長の「小学5年生にわかるような展示」を目指し、開館当初より画期的な展示方法を実現させている。1970年の大阪万博テーマ展示プロデューサーを務めた岡本太郎が、先のパリ留学中に夢と思い描いていた収蔵品展示のイメージとも重なっている。



1970年開催の大阪万博跡地に建てられた国立民族学博物館（民博）は、文化人類学、民族学の研究活動と、その成果を展示公開する博物館活動を一体的に行う「博物館機能をもった研究所」である。広大な敷地に建つ黒川紀章氏設計による研究部門と展示部門などからなる棟は、民族学博物館としても、また、20世紀後半以降に築かれた民族誌コレクションの収蔵点数としても世界最大規模を誇る。

開館四十周年にあたる2017年3月には本館の常設展示の全面改修も完了した。10年の歳月をかけて全面的にリニューアルした展示場は、オープン展示を主体とし、どこでも写真撮影が可能なほか、展示物に手で触れることが可能な場も多く設けられている。

本館2階の展示場に向かう途中、目にとまるのは、イントロダクション展示と題された4つの展示台だ。たとえばある展示台には「似ている？ それとも違う？」の問いかけがあり、日本の獅子舞など何点かの展示物が並ぶ。解説を読むと、どれも仮面だが、世界各地のものだとわかる。その隣の展示台には、一見何の関連もなさそうなふたつの展示物が飾られ、「違う？ それとも似ている？」との問いかけ。解説を見て驚いた。なんといずれも棺桶だという。最後は「これは道具？ それともアート？」の問いとともに、見なれた形の椅子と、動物の形をした椅子と思われる外見が異なる椅子が並べられていた。これらのなぞかけのような展示の意味するところとは？

アフリカの人類学、ことにザンビア・チェワの人びとの仮面を、長年研究フィールドとしてきた吉田憲司館長は、次のように解説する。

「ここは、これから展示を見てもらうための構え、つまり異文化の展示を見る際の視点をつくってもらう場になっています。仮面と棺桶の展示は、モノの多様性と共通性に気付いてほしい。椅子の展示では、今までは片方はアートとして美術館に、もう一方は生活用具として博物館に入っていたもの、それっておかしくない？と、物事を相対的に見る視点をもってもらえれば、と考えました」

異文化の展示を見る際の視点——それは異なるものと向き合う時の視点にも共通する。民博のこれまでの取り組みを何うなかでも最も印象的だったのは、そのプロセスから得た新しい気付きや発見から、自身の視点の偏りを認識し、向き合うことで改善を重ね、現在に至っているということである。吉田館長のお話からは、そうした視点の重要性を、あらためて感じていただけることと思う。

民博の創設と、現代における博物館の役割

国立民族学博物館は、大学共同利用機関として1974年に創設、77年に開館しました。大学共同利用機関とは、文字通り個々の大学では維持できないような膨大な収集・保管資料を研究に広く利用できるという、非常にユニークな制度です。そのほかにも、後期博士課程を教育する大学院大学という機能も備えています。開館当初のコレクション群は大きく3つに分けられます。第一は旧東京大学人類学教室の資料（考古学資料を除く）、第二が政財界で活躍し民



イントロダクション展示は、パネルに記された問いかけに考えをめぐらすうちに、世界の文化を考える大きな視点を得られるように工夫されている。写真/仮面(右)、棺桶(中央)、椅子(左)



民博での「異文化へのまなざし——大英博物館コレクションにさぐる」展のあと、東京・世田谷美術館でも同展を開催。博物館と美術館のあり方の違いが随所に見受けられた。



「異文化へのまなざし」展は、大英博物館との共同企画で、アフリカ、オセアニア、日本が近代を通じて互いにそれぞれをどのように捉えてきたのか、博物館の展示のあり方やコレクション、写真を通じてたどりながら、私たち自身の「異文化」観を見つめ直そうという展示でした。この展覧会にはさまざまな試みやその後の新たな展開もありました。たとえばこの展示が民博の常設展示のあり方を再考するものともなり、開館以来となる全面改修の議論がここから始まったのです。また、民博での開催のあと、東京の世田谷美術館で同じ展示をするという試みも行いました。というのは、英語では「ミュージアム」というひとつの言葉を、日本語では「美術館」「博物館」と区別して訳し分けられたことで、その役割の区別が必要以上に強くなってしまっていると感じたからです。それぞれがもつ役割の区別をなくすべきだとは思いませんが、自分たちの文化のものは美術館へ、異文化のものは博物館へといった本来関係ない区別にまで及ぶのは厄介なことだと思っています。これでは、美術館と博物館、それぞれのモノを見る時でも、世界の半分しか見えないということになりかねない

気がします。私が考える両者の違いは、「モノの背後にある歴史や文化を語ろうとする博物館」と、「特定の時代や社会を背景に生まれた作品と直接向き合う場が美術館」というように、モノに対するアプローチの違いだと思っています。そのため同じテーマの展示を、博物館と美術館の両方で行うことでその壁が取り払われ、世界がすべて見えてくるのではないかと考えたのです。実際にやってみるといろいろな発見がありました。たとえば当時はまだ珍しい、取り組みだったギャラリー・トークを両館で行ったのですが、民博では大変好評で、トークを聞くことで理解が深まるという反応だったのが、世田谷美術館では「鑑賞の邪魔になる」というクレームがきて結局1回で終わってしまった、ということがありました。それで気付いたのですが、ひとりの人間でも博物館に行く時と美術館に行く時では構えが違う。博物館では初めてのものを見て勉強しようとするのに、美術館では学ぼうという意識で行くことはないのではないか。同じひとりの人間のなかでもこれだけ構えの違いがあるとすれば、同じ展示を博物館と美術館で開くだけではこの壁を取り払えないと考え、次に企画したのが「アジアとヨー



常設されている地域展示では、世界を9地域に分け、オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、南アジア、東南アジア、中央・北アジア、東アジア展示（朝鮮半島の文化、中国地域の文化、日本の文化）を巡る世界一周の旅ができる。そのほか音楽展示や言語展示など、テーマに特化したユニークな展示も見ることができる。

俗学者でもあった渋沢敬三「*」による私設博物館「アチック・ミュージアム」の収集資料です。これに70年大阪万博のテーマ館であった太陽の塔内部での展示のために世界各地から収集された、仮面や彫像（神像）を中心とした民族資料（当初は寄託のちに寄贈）が加わり、この3つを核とした4万5000点の収蔵品でオープンしました。開館から40年以上経過した現在、収蔵品は34万5000点にのぼります。初代館長の梅棹忠夫先生は当初から「世界第一級の博物館を目指す」と言っておられました。今ではコレクションや世界全体をカバーする研究者の陣容などでは世界のトップに立ったと言えると思います。民博は一般的な博物館とは異なり、文化人類学・民族学の研究機関であることが前提にあります。つまり、その研究に必要な資料を収集し、研究の成果を展示するという位置付けです。たとえば新聞社主催の展覧会などは一切受け付けず、常設展はもちろん、特別展も博物館の内部の研究者と大学の研究者との共同研究の成果を発表する場となっています。博物館が求められる役割を考えるうえで、私は美術史家ダンカン・キャメロンの「ミュージアムにはテンプルとフォーラムというふたつの選択肢がある」という主張を参考に

しています。「テンプルとしてのミュージアム」とは、すでに価値の定まった至宝を人びとが拝みに来る、神殿のような場所。対して「フォーラムとしてのミュージアム」とは、人びとがそこに集まり、未知なるものに出会い、そこから議論が始まっていく場所という意味です。私がこのキャメロンの説を引用しながら、「これからの博物館はフォーラムとしての性格をより強く求められる」と発言したのは、1994年の当館創設二十周年のことでした。以降、数々の展覧会の企画を通して、フォーラムとしてのミュージアム、つまり展示する側、展示を見る側、展示される側が情報や意見を交換して議論を行う場となるよう、実践を重ねて今日に至ります。また、世界の博物館全体も、フォーラムとしての性格を色濃く帯びるようになってきていると思います。

壁を取り払い、新たなつながりをつくる



企画展「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」が開催された折、日本に住む人びとへのメッセージを込めて、『いのちの輪だち』など4点の作品が制作され、民博におさめられた。

多言語化による国際的な情報発信の実現を進めています。

また、2014年より着手しているのが、フォーラム型情報ミュージアムの構築です。これは民博の資料の情報を、国内外の研究者や利用者ばかりでなく、その資料をつかったコミュニティの人びと、つまり現地の人たちとも共有し、そこから得られた知見をデータベースに加えていくというものです。

具体的には、実際に現地の方に博物館にお越しただいて、資料を見てもらい新たな情報を教えてもらう。あるいは資料を里帰り展示のかたちで現地にもって行って展示し、そこで情報を付け加えてもらうこともあ

ります。里帰り展は、これまで台湾や韓国などで実現していません。ほかにもインターネットを通じたワークショップのかわりも取ることがあります。現地でもコミュニティの人に集まってもらい、画面に資料を映しながら議論してもらったなかで出てきた情報を全部データベースに入れていくわけです。データベースと

いつでも、単純に資料の名前や使用方法といったものだけでなく、それぞれの人がそのモノについても知っている知識や、自分が子どもの頃にいったような「記憶」まですべて入れていくのです。

これらの成果はデジタル化するだけでなく、まだインターネットにアクセスできない地域などの場合、紙媒体に落とし現地に配ることもあります。また公開の範囲についても、現在のところ完全な公開にはなっていません。それぞれのコミュニティの人たちの同意を得ることが必要です。まずコミュニティで公開し、一般公開できるものから順次公開し

ていく予定です。一方で秘密の儀礼などもありますから、それは公開しないことがその文化を守ることに必要だと考えています。

現在29のプロジェクトが進んでおり、研究対象は世界各地にわたっています。それぞれのプロジェクトに参加してくださる方は、単に資料の情報を豊かにするだけでなく、ここに自分たちの経験や知識を残していくことで、自分たちの子孫にこの知識や経験を伝えたいという願いをもって参加してくださる方もおられます。また、台湾や中国から自分たちの村に伝わるテキスタイルの復興をしようとする方々が自費でこちらに來られて、「ここで初めて自分たちの祖先がつくったものに出会えた。よくぞ残しておいてくれた」と涙を流して喜ばれたこともありました。

ほかにも、奄美群島の徳之島では同時期に集落ごとにお祭りを行うのですが、お互いの隣の集落ではどんなことをやっているかは知らなかった。

それが映像のデータベースを通して他集落でどんな歌や踊りが伝承されているかを知ること、自分たちの集落の芸能を見直すきっかけになったということもあります。我々としても、研究者にはない視点で現地のコミュニティの人たちからフィールドバックしてもらうことで、次に現地で行うフィールドワーク自

報を見ることができるようになります。スマホの情報は自宅のパソコンでも見ることが可能です。ほかにも展示資料の情報を提供するだけでなく、来館者の興味に合わせて展示場における最適なコースを設定し、誘導してくれるようなシステムも開発しました。情報の高度化は、今後ますます必要になると思います。

また2025年には「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに大阪・関西万博が開催されますが、かつて70年万博のテーマ展示プロデューサーであった岡本太郎が言ったように、万博は人類の祭典だと思います。技術進歩が急速な現代では、この時のような未来予想型の万博は難しいと思いますが、祭りという性格は残ります。世界中から人が集まるといふ意義は大きいと思います。

実際の会場では展示という手段を使うわけですから、世界各国の博物館と協力するのが一番です。博物館を基地にして、それぞれの国が自分たちが主張したいテーマの展示をそこで行うといった仕組みをつくってはどうでしょうか。

そもそも遺伝的有効個体数がほかの動物より極めて少ない人類が、なぜ地球全体を覆うようになったのかという、生物的多様性の少なさを文化的多様性で補っているからです。人類の「いのちが輝く」ためには文

体が変わっていくのです。双方向に知識のやり取りができ、知識の集積ができていく。この取り組みは、今後もずっと続けていきたいと思えますし、民博の資料は基本的にすべてフォーラム型のデータベース化をしていくべきだと考えています。とはいえ何しろ34万点以上あるので、なかなか終わらないのですが(笑)、より多くの資料をデータベース化するということで、民博が世界中の人たちの記憶の貯蔵庫となり、ここを通して世界中とつながっていく、プラットフォームになればと願っています。

博物館が担う平和構築の新しいかたち

現在、本館常設展示室のアフリカコーナーの一角に、『いのちの輪だち』という作品が展示されています。これは、アフリカ・モザンビークで独立後1992年まで続いた内戦の終結後、民間に大量に残された武器を農具と交換して回収し、その武器を使って現地のアーティストが作品をつくり平和を訴える「銃を鋸に」という運動のなかで生まれたものです。運動の創始者はアングリカンチャーチのデニス・セングラネという司教で、2013年、この作品が民博におさめられた際に行った企画展「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」にむけて

化学的な多様性を保障すること、それなくしてこのテーマは語れないと思えます。

これは民博のミッションにも共通しています。民博のミッションは、世界中の人たちの文化の多様性を敬意をもって尊重し、同時代を生きている人類としての共感を育むこと、そのための場をつくること。「フォーラムとしてのミュージアム」として、民博ができることは、まだまだたくさんあります。今後も新しい挑戦を発信していきたいと考えています。



3月5日から導入される新システムの電子ガイドは、スマートフォンのアプリを使用するため館内のビデオテーク(右)などでの閲覧はもちろん、自宅に情報を持ち帰ることもできる。

明されたのです。その話を私の友人でもある大英博物館のキュレーターから聞き、それならばとマドゥット氏も日本にお呼びし、おふたりを引き合わせようということになりました。その後、南スーダンでも同じような活動が始まっています。これは大英博物館で作品が展示されていて、それを見た人がいたからこそ可能となった平和構築の展開のかたちでしょう。博物館が展示物を通じて次の行動を起こさせる力をもっている——「フォーラムとしてのミュージアム」が社会貢献にまでつながった事例ではないかと思えます。

多様性の尊重と共感を育む場——博物館のミッションと可能性

2020年は、これまで何年もかけて準備してきたことが一気に実現する年となります。ちょうどこの3月に電子ガイドやビデオテークが一新されるのもそのひとつです。

電子ガイドについては、これまで館内でPSPを貸出していたシステムを進化させます。アプリをダウンロードすることで、自分のスマートフォンをかざすだけで展示資料の情報を閲覧できるうえ、そのデータがスマホに記録されるようになります。さらにそれをもってビデオテークのブースに行くと、関連映像や研究情



吉田憲司
よしだ・けんじ
1955年、京都市生まれ。京都大学文学部卒業、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了、学術博士。大阪大学文学部助手、国立民族学博物館助手などを経て現職。著書は『仮面の森——アフリカ・チュワ社会における仮面結社、憑霊、邪術』(講談社、第5回日本アフリカ学会研究奨励賞受賞)、『文化の「肖像」——ネットワーク型ミュージオロジーの試み』(岩波書店)、『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』(岩波書店、第22回サントリール賞受賞、第1回木村重信民族芸術学会賞受賞)など多数。

注 * 若くして祖父洪沢栄一からその後継者に懇請され、実業界に入る。横浜正金銀行、第一銀行を経て、第二次世界大戦終了前後に日本銀行総裁、大蔵大臣を務め、転換期の日本経済において重責を担う。また、自邸で立ち上げた「アチック・ミュージアム」には多くの同人が集まり、岡正雄、宮本常一といった研究者も輩出。九学会(人類・民俗・地理・宗教・考古・心理・言語・社会・民族)連合会会長を務め、文化の実地的・総合的見方を説いた。